

# 『菩薩惣持法』と『観心論』(一)

田 中 良 昭

## 一 序——『観心論』に関する私見の訂正——

『観心論』一卷は、北宗禅の祖大通神秀の代表的著作であることは、今日学界の定説になっている。ところでこの著作が、朝鮮の隆熙元年(一九〇七)虎距山雲門寺で刊行された『禅門撮要』においては、「初祖達摩大師説」の内題が付され、同じく朝鮮の隆慶四年(一五七〇)重刊の安心寺本では、「達摩大師観心論」の標題を有し、また菩提達摩の語録集と目されたこともあった『少室六門』の第二門には、これが「破相論」の名で収録されており、更には遡って、金沢文庫所蔵の「建長四年(一二五二)六月廿四日未時書了 執筆夜叉王丸」の奥付を有する一本、及び建仁元年(一二〇二)大甫丸筆なる写本の両本共に、「達磨(建仁元年本は摩)和尚観心破相論」の題名が付されている如く、嘗ては禅宗初祖菩提達摩の著作とされていた時代もあった。

しかるに、この『観心論』が別に『破相論』とも呼ばれ、実際には菩提達摩の著作ではなく、<sup>(1)</sup>慧琳の著わした『一切経音義』の卷一〇〇、四二張に、「観心論、大通神秀作」とあることによつて、大通神秀の著作であることが神尾式春氏によつて明らかにされて以来、<sup>(2)</sup>『観心論』一卷は大通神秀の著作であり、従つてこれが、北宗禅研究の代表的資料であるとされているのである。

ところで、同じ『観心論』と題するものには、この大通神秀のものほかに、別名『煎乳論』ともいわれる天台智顛のものが存在する。そのために、ジャイルズ氏が、神秀の著作とされる『観心論』の一異本であるS二五九五を解説するに際して、

5920 観心論 \*Kuan hsin lun, Ich. "Meditation on the mind":  
a doctrinal work consisting of a catechism. [This may be  
the work composed by 智顛 Chih-i (d. 597), on which N. 1575

is a commentary.] At end, in a later hand: 庚申年五月十三日 [H] 記 "Recorded on the 23rd [day] of the 5th moon of *Keng-shen*" [A. D. 780?]. Good neat MS. Buff paper. On a roller. 12 $\frac{3}{4}$  ft. Y. 85 (3). S. 2595.

と推定されたのは、北宗禅の神秀の『観心論』を、天台智顛の『観心論』とみなした誤解によるものである。

この天台智顛の『観心論』が『煎乳論』の異名を有するようには、神秀の『観心論』が『破相論』の異名で行われていたことは、かなり古い時代からのようである。すなわち、前述の如く『観心論』が『破相論』の異名でもって行われていた例は、『少室六門』にみられることであるが、近年五山版の『少室六門』と『達磨大師三論』を紹介された椎名宏雄氏の論文をみても、鎌倉末期から南北朝初期頃(一三〇〇年頃)に刊行された六地藏寺蔵の覆宋五山版の『少室六門』の第二門が、「第二門破相論」であり、至徳四年(二三八七)京都臨川寺にて刊行された駒大、慶大蔵の五山版の『達磨大師三論』でも、その第三に「達磨大師破相論」の題名が付されていることが知られる。

このように、『観心論』の異名として、『破相論』『達磨大師破相論』『達磨和尚観心破相論』の如き『破相論』の題名が数多く用いられていることから、逆に『破相論』の異名を持った敦煌本のP三七七七にある『菩薩惣持法』一卷を、こ

れ亦神秀の『観心論』の一異本とみなし、これを『観心論』の一異本として掲げたことがある。すなわち昭和四六年(一九七二)三月に公にした拙稿「敦煌禅宗資料分類目録初稿Ⅱ禅法・修道論」<sup>[1]</sup>においてである。今その中の「観心論」の項を示せば、次の如くである。

### 3. 観心論 [破相論, 契経論, 破二乘見, 菩薩惣持法]

- ① S 2595 ② S 5532 ③ P 2460 ④ P 2657 ⑤ P 3777  
⑥ P 4646 ⑦ 龍谷大学所蔵122『観門法大乘法論』本

[敦煌出土以外のもの]

- ⑧ 朝鮮『禅門撮要』本 ⑨ 朝鮮安心寺本 ⑩ 金沢文庫建長4年再写本 ⑪ 金沢文庫建仁元年写本 ⑫ 『少室六門集』本<sup>(5)</sup>

ここでは『観心論』の異本として、都合一二種を列記したのである。しかもこれには、先の椎名氏の論文によって、更に『達磨大師三論』本を追加することが可能になり、椎名氏はそれ以外にも金沢文庫所蔵古写本と、京都大学所蔵写本の二種の存在を挙げておられるからして、新たに三種が追加されることになる。<sup>(6)</sup>

今、敦煌本以外は別として、敦煌本についてその題名の有無とその内容を表記してみると、次の如くである。

文献番号	首題	尾題
① S 二五九五	(首欠)	観心論一卷
② S 五五三二	(首欠)	ナシ

③	P 二四六〇	(首欠)	(尾欠)
④	P 二六五七	(首欠)	(尾欠)
⑤	P 三七七七	菩薩惣持法一卷 亦名破相論、亦 名契経論、亦名 破二乘見	ナシ
⑥	P 四六四六	観心論	ナシ
⑦	『観門法大乘法 論』本	ナシ	ナシ

この表からも明らかな如く、首尾を欠くP二四六〇とP二六五七に題名がないのは当然としても、首部のみを欠くS五五三二には尾題がなく、その他の四本はすべて首尾完全ではあるが、題名を有するのは、今問題のP三七七七以外では、僅かにS二五九五の尾題に「観心論一卷」、P四六四六の首題に「観心論」とあるに過ぎない。問題はP三七七七の首題である。

ところでこのP三七七七写本は、縦二七センチ、横一〇六・五センチという長卷子本で、最初に幅二六センチの表紙があり、それには黄色のひもがつけられ、その表紙には、縦二七センチ、横三センチの茶色の紙が貼りつけられていて、そこにこの長卷子の内容目次が、三行にわたって記されているが、そこに示された目次によれば、この写本には、

(一)防外五辛中五辛内五辛持犯軌則義理文

『菩薩惣持法』と『観心論』(一)(田 中)

- (二)菩薩惣持法一卷
  - (三)了性句并序一卷
  - (四)澄心論一卷
  - (五)蘄州忍和尚道凡趣聖悟解脱宗修心要論一卷
- の都合五種が連写されているのである。

ところでこの五種の内、(三)の『了性句并序』、(四)の『澄心論』、(五)の『修心要論』の三種を連写した敦煌写本は、これ以外にS三五五八、S四〇六四、P三四三四があり、(三)の『了性句并序』に代えて、『天竺国菩薩摩訶師観門』と『法性論』(擬)を書写したものに、S二六六九と龍谷大学所蔵『観門法大乘法論』がある。しかもこの両者は、『達摩禅師観門』『法性論』(擬)『澄心論』『修心要論』に加えて今問題の『観心論』を連写しているのである。そこでこれら諸写本の連写の状況からして、P三七七七の『菩薩惣持法』『了性句并序』『澄心論』『修心要論』の連写も、これら諸写本と同類のものと推定し、加えて『菩薩惣持法』の異名として挙げられた「亦名破相論、亦名契経論、亦名破二乘見」の中に、神秀の『観心論』の異名である『破相論』があるところから、これを神秀の『観心論』の異本とみなし、その結果『菩薩惣持法』を『観心論』の異名と推定してしまったのである。

しかしながら実際にP三七七七を見ることが可能になってみると、実はこの『菩薩惣持法』が、神秀の『観心論』とは

まったく別のものであることが明らかとなったのである。従ってここに、先の拙稿「敦煌禅宗資料分類目録初稿 Ⅱ禅法・修道論<sup>[1]</sup>」の3「観心論」の記述内容を訂正し、異名としては「破相論」のみを置いて、それ以外の「契経論、破二乘見、菩薩惣持法」の記載、及びそのテキストとして挙げた第五の「⑤ P377」の一項を削除させていただきたいと考える。

しかしながら、別のものであることが明らかになったこの『菩薩惣持法』と『観心論』とが、まったく無関係のものであるかという点、両者に共通する独特の記述もあり、両者の間には何らかの関係があったものと推察されるのである。そこで本小論は、まず従来『観心論』について持っていた私見に対してこれを訂正し、しかる後に別のものであることが明らかになった『菩薩惣持法』と『観心論』について、新たに両者の間の関係を考察することを意図するものであるが、『菩薩惣持法』がかなりの長文ながら、学界未紹介の新資料でもあることからして、今回はその本文紹介をすることにし、それと『観心論』との関係等については、次の機会に譲ることにした。

(1) この点を最初に指摘されたのは、忽滑谷快天氏である。忽滑谷快天『禅学思想史』卷上(大正一二年七月、玄黄社)三一―八頁参照。

(2) 神尾式春「観心論私考」(『宗教研究』新九卷五号、昭和七年

九月)九八一―一〇四頁参照。

(3) Giles, L. *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum* 1957, London. p. 184 cf.

(4) 椎名宏雄「少室六門」と『達磨大師三論』(『駒沢大学仏教学部論集』九号、昭和五年一月)二〇八―二二二頁参照。

(5) 拙稿「敦煌禅宗資料分類目録切稿 Ⅱ禅法・修道論<sup>[1]</sup>」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』二九号、昭和四年三月)〇六頁。

(6) 椎名宏雄 前掲論文二二二頁参照。

## 二 『菩薩惣持法』の本文

菩薩惣持法一卷亦名破相論 亦名契経論 亦名破二乘見

明如來住世時、口宣爲法、教導群品、以爲法則。

明如來般涅槃後、遺教之法、著其文字、名爲正法。住世五百年。五百年後、名像法。住世一千年。像者喻義。

若有脩道行人、須了三種法義。第一是如來在世時。金口親說、(導)教道群品。第二是如來滅後。著文字十二部經。第三是像法中間。有二種人。一者造像、二者法離像。

夫求出世獲涅槃者、皆須了此三種因緣。若不了者、徒施功力。

竊見今時學道之輩、多將善惡同源、苦樂無差、是非齊一、地獄與天堂不別、魔佛與明暗渾然。或說、生死不異於涅槃。或說、涅槃即同於生死。或說、初別中乃有了、と分究問、因

緣復還爲一。

謹按涅槃經云、一切衆生、皆有佛性、皆有四大、皆有无明。

佛言、但是衆生、有此三種體。本起因緣從何所生。又言、四大從何體生。爲當從佛性體生、爲當從无明體生。又言、無明從何體生、爲從四大體生。

如此三種之體、各々從何而生。爲當本源是一、中乃分三。今欲希求、還合爲一。爲當本是三體、中間和合。而今方便欲擬分析、還復歸三。若本是一、後緣何事分作於三。本若是三、後有何緣合爲一體。當是初一後三、爲復初三後一。三一先後、請爲明解。

如此佛性、無明、及以四大一一、須有指歸。若無指歸、亦無勞措手。而言學者、如來教示了了見性、萬行威儀皆能成辨。出生死海證大涅槃、正法住世五百年者、是著文字經教是也。

謹按法華教云、如來說初中後善、三種大義云何可名初中後善。初者、清濁初分開闢之際。一。其初者、說其世尊本起因緣、從何所生。二。其初者、若求道之人須明涅槃本際。三。其初者、須明一切衆生因緣起時、以何爲母、生花別類。四。其初者、分別四大五蔭本起因緣、從何積聚。五。其初者、能明地獄本從何立、復在何方而安置之。六。其又初六種差別不同。石如上六種、管於初字之義。云々。

中者、說世界中萬像形位、皆有生滅之相。如此萬像、爲復有盡、爲復無盡。若有盡、至何方、若無盡者、何因緣現生滅相。如上管於中字之義。云々。

後善者、明諸佛如來以大慈悲究竟、能救一切衆生歸大涅槃、能令四生盡歸寂滅。右如是後善字之義。云々。

像法住世一千年者、爲衆生往返沈淪、具受生死輪轉、識性遍受已、訖還至人身。今生像法中、皆爲沈迷覆蓋故、不了要藉形像、始能發起道心。道心既發、須訪大善知識。決斷生死、莫被形像所攝、而忘眞如。

佛在世時、羅漢比丘、見行如來知惠而證涅槃。其知惠門、略說十種、條義不同。羅漢比丘、悉能分別。

第一決了涅槃。第二決斷生死世界從何緣起。第三能知四維上下邊垂里際。第四能了身中佛性、緣何等事與五蔭相纏。第五能知四大五蔭敗壞之身、以何因緣拘繫佛性、令墮五趣。第六能了世間晝夜之相、晝現爲樂、夜現爲苦、年月相催、沒在生老病死。若如此之事、名大因緣。第七能了四生、胎卵濕化異類之形、發本因緣從何所生。第八具諸如來愍持之教、獸捨世間、道業圓備、獲涅槃果。第九羅漢善種、爲度衆生、代代相傳、紹隆佛性、內祕菩薩之行、外現聲聞。三界遊行、遇不遇也。福德之人、始能親近。第十若有衆生曾於住世、已經發露、親近正法、令生人身。既得人身、得遇菩薩、大乘正道、能入涅槃、解脫之路、亦離於生死苦海。當爾。世尊口受羅教者、其義如是。又於十種一々條中、有无量義。能了如上十種法者、是名見性菩薩人也。

又正法住世五百年者、亦是過去衆生上根上智、尋讀如來正

法經典、悟理得道之人。何以故、過去衆生、與佛滅度時爲相近故。如來智惠真正之法、易顯現故。所有衆生、尋讀如來真正經典、卽得悟解、不假諸餘有爲之相、而發善故。當此之際、若有衆生希求解脫、厭捨世間、尋讀經典、不虧戒行、捨一報便卽解脫。此是正法住世五百年時、與今像法時人並悉不同。

像法住世一千年者、今時是也。今時衆生悉皆愚昧、諸根暗鈍不了因緣。何以故、爲其識性。與佛滅度時年月多遠、亦爲波旬改壞法故。法既被改、佛惠威力不照及故。爲輪廻昏迷覆故。所以像法中生。何以故、衆生若也不以形像而招引時、亦無發心求於善道。今縱以像引得之者、其心一志不離於像。將諸金銀銅鐵泥木、廣興其像以心倚託、將作究竟涅槃之果、長生妙道何曰悟也。曾聞識是長生之識、身是破壞之身。識卽墮業受生、身便銷亡散。是故、智人所修、惟修於性、愚人所重、惟重於身。乃不知、身依性立、性在身存。但貴於身、又輕妙性、如有見性。智者自分了性、因緣亦明身本。修行人、不了身性二體因緣、徒自千生、迷心修學、無解脫期。

云、第一如來正法、是親發授時。○第二如來滅後五百年中、諸修道人、不假有相之法、萬行威儀並在身行。第三如來像法者是一千年中、行人以像爲事。智人見像而證正理、愚人失理。如來於自身上起方便法、將照真理亦爲譬喻。如來當爲菩薩上智之人說。證道果時、我當成道、得參糾陸勝。白牛乳

糜、喫便證三明六通、具八解脫。其牛非黑非黃、亦非赤色、純是白色。其牛不在高原、不居下濕、不與特牛同群、亦不喫閻浮水草。於閻浮界內亦無腳跡、身作紫磨金色。我當喫此牛乳、卽成佛道。如來是法者、當對菩薩說。是方便以爲譬喻。其次說於形像、亦皆悉是方便譬喻。所以著其文字也。

○釋曰

如來清淨法身、不因三毒六賊所生。亦不稟四大五蔭所生。是故法爾自然、常樂我淨。入此三界、以爲世使、勸導人倫、令歸寂滅。

如來清淨心、不染貪。是名心大禪定、亦名佛寶、亦名禪師。

如來清淨口、不居嗔。是名口大智惠、亦名法寶、亦名法師。

如來清淨身、不染觸。是名身持清淨戒、亦名僧寶、亦名律師。

此三法者、是戒定惠。二名心口身、亦名三業清淨。衆生和合、心爲染貪、是意業不定。以不定故、是名心染貪毒。衆生和合、口爲染嗔、是口業無惠。以無「惠」故、是名口染嗔毒。衆生和合、身爲染觸、是身業無戒。以無戒故、是名身染癡毒。此名衆生身中三毒、亦名三惡、亦名三戒。心爲貪界、口爲嗔界、身爲癡界。如來三界、同衆生類。與衆生說心口身、爲衆生有三業。

故是以、如來說三業清淨。如來心不染貪慾。觀生死財寶如毒蛇相 是故

心不染貪境、心爲佛寶。以心定故、名爲壹斗。如來口不染嗔

囂。觀衆生身分如父母子肉相 是故口不取嗔境、口爲法寶。以口惠故、名爲

壹斗。如來身不染癡慾。觀世女人如臃瘡相 是故身不取癡境、身爲僧寶。

以身清淨、名爲壹斗。

右此心口身具持戒定惠、是名參斗。斗者數之量也。乳者是如來心口身中智惠也。如來常以三大智惠調伏衆生。一切衆生若得如來戒定惠法能具持、名飲得如來參斗。

陸勝者、如來六根本無、六識清淨、是名陸勝。勝者亦同斗數義。如來滅後、留此戒定惠法、與脩道比丘。是故方便道、

我成道時、先喫參斗陸勝乳糜、證得三明六通。三明者心了觀見二種空定、口能分別二種之惠、身能具持二種之戒。如是心

口身中、各各具大智惠。智惠者喻於乳糜。今時比丘、不閑如來心口身戒定惠之義。便喫世閒生死牛乳、不會佛意。如此世

閒牛者、皆因雄雌相染、然始有胎。因有胎故、便卽有乳。據此乳者、姪慾之因、精血所變、行人飲之、豈不是觸。罪業之

本、沉溺之因、皆由此成也。如來以此戒定惠名爲參斗、陸根清淨名爲陸勝。六根者卽是眼耳鼻舌身是也。如來以六根清淨

法、化道有緣。是故名六波羅蜜法。

檀波羅蜜者、是如來法施都名號也。如來以戒定惠及六波羅蜜三千威儀八萬細行、施與有緣衆生。施者施也。施張如上等法上中下品比丘、行用作解脫因緣。是故檀爲萬行之首也。

(戒) 施波羅者、是如來一切戒律之名號也。如來先施禁戒、然後

授法。戒如城隍心、如其王法、如龍衣冠冕。譬如國主無有城

隍、不串龍衣、不戴冠冕、不得稱爲國主。如比丘不以如來禁

戒正遇、凡心縱受法言、不爲解脫之果。是故先施戒行。約勒

比丘身心、禁縛無明、調柔性地、性地熟然、納其種子。以地

壤故、種一收萬。是故如來一切戒律、能禁比丘身中一切過患。

羸提波羅者、是如來忍辱法之名號也。如來入三界置法、有

六種之厄。第一王難障閉、第二父母障閉、第三妻妾男女障閉、

第四一切財寶障閉、第五崩友障閉、第六邪見障閉、如有修道

之人求解脫者、皆爲如前六種之厄、而爲閉障。但有比丘欲求

出離、皆須忍受。如此六難仍自飲、有無量境界、皆是障閉。

如來大忍辱施與比丘。比丘常須持此忍辱。

比梨耶波羅蜜者、是如來精進之法。如來法身常精進、體今

留此、無尋常精進、法施與比丘。如有比丘求解脫者、攝除懈

怠、念之中、堅持精進。

禪波羅蜜者、是如來禪定之法。施與比丘、若有比丘具持如

來禪定法者、能除身中三毒六賊及一切諸境、不使心神攀緣一

切諸境界。故是名禪定。

般若波羅蜜者、是如來智惠之法。如來常以智惠、教導衆生。

一切衆生言求解脫、須有智惠分別善惡。若無智惠、縱求解脫

不可得。又言、蜜者達於彼岸之義、亦是智惠之惣名者也。如

來常以六種之法、施與求解脫人。是故著文傳於後學、令其行

人知其方便。又如來一體三寶者、亦是如來心口身也。心大禪定是名佛寶、口大智慧是名法寶、身大清淨是名僧寶。此名一中具三。故名三寶、亦名三定、亦名三禪、亦名三解脫、亦名三業清淨。

今時比丘、破滅如來三禪之法。何以故、如來定心、是禪。不染貪。如來智慧口、不染嗔。是惠。如來清淨身、不染癡。是戒。心爲禪師、口爲法師。身爲律師。一身之中、具持心口身戒定惠。是名三寶、是名三定。

今時比丘、破毀三寶、不了如來方便因緣。分散正法、以爲三段。禪師不讀經、不持律、山中端坐、妄道得悟。是名破如來心法。法師上高座、說章疏、不持定律。是名破如來口法。律師執事、不了定惠之義。是名破如來身法。

如來勸持、在比丘身具三種惠。因何三法當頭自行。唯一體三寶義。心是佛寶、是性管於口。口是法寶、是體管於身。身是僧寶、含其衆善。如此心口身、互相管束。始名身中住持三寶。今時禪師、合是心法。今時法師、合是口法。今時律師、合是身法。

云何比丘三禪之法。互不相管、豈不錯亂者。禪師、法師、律師、更互相嫌、三爲不是。即是錯亂比丘。受如來法者、持戒比丘、心須似如來心、斷貪是名心業清淨、亦名心定、定者是禪師。壹糾。口須似如來口、斷嗔名口業惠、惠者法師也。貳糾。身須似如來身、斷癡染是名身業清淨、亦名身戒者

律師也。參糾。此是比丘受如來心口身法戒定惠、是名持得如來三寶、是名禪法。既能持得如來之法、具足之者、是名比丘身中一體三寶、亦名三糾乳糜、亦名三禪、亦名清淨。一如世尊、不縱六賊、六根清淨、常持六法、是名六升。此是比丘受持頓教上智之人、始可得了如來起勸法者。

若有比丘受如來法者、須行道無時歇息。如來本意、行其佛道之道。不是繞其殿塔、行其道路之道。比丘身中行其佛道者、而有五種。一行眼道。不得觀世閒色相、發動三業、唯得觀如來解脫之道。二行耳道。不得邪聽一切亂聲、起三業、唯聽聞真正法聲。第三行鼻道。不得嗅悅男香女香、幻或三業、唯須分別清淨法香。四行口道。不得飲酒食肉。其酒肉各有二種。酒二種者、一是有導酒、二是無導酒。〔有導酒〕者、即是世閒飲醉之酒。無導酒者、即是行人耽着世事、毀禁戒者、是名無導昏亂之酒。肉有二種者、一是有導之肉、二是無導之肉。有導肉者、即衆生身、分質導血肉。二無導肉者、即是暴酷妬嫉、呪咀罵詈、毀禁之語。如此口者、能生惡業、唯得受持讀經典歌揚讚頌。是名善口。五行心道。不得亂思五慾之樂、解動三業、污溼身中三內淨性、唯得思惟厭世閒法求解脫果。若是比丘、常須行五種之道。勿使色聲香味觸損汚佛性。是名清淨比丘。

若有比丘不行分別、不行如上五種善道、名破塔壞寺得罪無量。如來勸諸行人造諸功德。形像者普及。比丘而合造之、凡



夫亦不合造。何以故、功德法性悉是無爲。云何令人造質身像而契佛意。其義甚乖。佛言、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀。若據此言、但是有爲、皆是幻化。云何行人專崇此像、豈非迷倒。略徵有爲之法、而契真如。釋之於左、有爲形像數因寺。寺一所方三門、一所三門有六扇<sub>扉</sub>。三門外左右金剛、各執一杵立。三門內二神王、各把一刀。三門下左右各一師子。佛前燃卅九盞燈。又令放四十九生、入長生池。七寶香爐、燒無價寶香、出入洗淨澡盥、淨水瓶、持鉢一口、用盛齋飯。濾羅一。講堂一所。法座一所。聖客左右有阿難迦葉。各剃除鬚髮、而串三衣。佛前左右菩薩、赤體不着衣、眼而串瓔珞。佛前燃長明燈、常令不絕。寺中衆妙高廣樓閣。浮圖一所、七級十二級。四十九尺長幡、色有五種。寺中澡浴池一所。比丘苦行名目、剋眼、燒頂、截腕、練指、鈎身、刺劍、斷五辛。俗人供養者、病比丘、聾脂瘡癩攣跛癱、及坑中餓猶貧窮下賤。得福無量者。

釋曰、

寺者清淨之義、亦<sup>〔喻〕</sup>持戒比丘。具持如來戒行、能殺身中三毒六賊及一切煩惱之境悟了。大乘見性比丘、此比丘然始銷、得十方供養、即得堪爲檀越。解脫橋梁還得、如彼佛在世時。羅漢無異了了見性、又以大乘真正妙法、接化群盲、得度生死。如此比丘、能具如來三千威儀六萬細行。三千威儀者、降伏身中三毒。三業者清淨。從是戒定惠忠有無量法。比丘得三業清

淨、是人了三量者義。故是三千威儀六萬細行者、爲六根清淨、能制六賊、具神通、既有六通、能具一切智。是故一切智中、能攝六萬細行。若有比丘具如上事、身心悟解無滯碍者。故喻持戒清淨比丘爲活寺。世尊勸人造寺者、其義如是。

三門義者、亦喻比丘身。比丘能持三戒、名爲三門。心定於貪、名爲一戒。口戒於嗔、是名爲二戒。身戒於癡、是名三戒。心戒是定、口戒是惠、身戒是戒。如此戒定惠、能降貪嗔癡三毒之性、三業清淨。三業既淨、是名三明。是名三聚淨戒。是故世尊勸造寺者、標三門爲首。

三門下金剛把杵防衛者、亦喻比丘身。比丘爲持戒行、外見觸境、境不入心。常以智心、觀外觸境。若見觸境、能避之故、喻智心爲杵、勇猛喻於金剛。外見諸觸來、以勇智能降伏之。是故如來勸諸行人造。

金剛像內神王把刀者、亦喻比丘具持戒行。常禁身中三毒六賊、不令興起。常以智惠降伏無明。淨性喻於神王、智惠喻於刀也。比丘內持智惠、心神清淨故、喻門內神王也。

三門下左右二師子者、亦喻比丘身。比丘於諸戒而得自在、於諸智惠亦得自在。是故比丘亦能降內外諸惡境界。心得自在故、喻爲師子。師子於諸百獸以爲王也。比丘心王於智惠門出入自在、亦復如是。

佛殿者、亦喻比丘身中清淨佛性、清淨喻殿中佛像萬種、莊嚴者、喻比丘功德善業智惠妙行也。

佛前燃長明燈者、亦喻比丘身具如來智慧之法。是故燈明喻於正法、法光能破愚癡之暗也。

卅九竅者、喻比丘七竅。是也所謂兩眼〔兩耳〕兩鼻及口、是爲七。二竅之中各有其七識。七々卅九識常無境染、眞實正念無有散亂。故喻於長明燈也。是故行人若無七竅納受如來種種妙法、不可分別善惡因緣也。

又令行人放卅九生入長生池者、亦喻比丘身。比丘常以七竅卅九識清淨無染。以卅九識善業莊嚴、積於諸佛性。藏喻長生池、放生喻比丘善業功德。惠能成就、至無常日、能得生存。善業扶護、相因解脫、獲涅槃果。一受快樂、更無滅壞。故號長生。

七寶香爐燒無價寶香、亦喻比丘身。比丘七竅七識合成、因其七識有大分別、常出種種和雅法音。故喻七識爲七寶香爐。供養者、喻歌頌讚嘆。諸佛嘆之故、喻比丘具持法。故名七寶香爐燒無價香。

出入灌淨以水洗者、亦喻比丘身。比丘常護內性、不令內賊興起而發三毒。是名內護淨。外見五欲之境、常以智慧能除伏之。是名外護淨。

澡瓶盛水者、亦喻比丘身。瓶喻於身、淨水喻智。身中佛性常被無明所污。若有覺性、比丘觀如身中三毒六賊欲起動者、卽以智慧而降伏之。是故名爲瓶水洗淨。

鉢孟者亦喻比丘身。飯者喻於智。行食觸鉢不受者、喻諸境

入心不納受。故喻於觸食不受心無染也。

濾羅者亦喻比丘身。水者喻淨性、羅上濁者、喻煩惱。羅下清者、喻心不染諸境攀緣、常能正念。故喻爲澄濾心神清淨妙行。

講堂者、亦喻比丘身。

法座者、喻覺性。法師者、喻法智。聽衆身中煩惱、若有比丘煩惱境起、當以法智而覺察之、染入正念故、喻煩惱爲聽衆也。

聖客者、亦喻比丘身中佛性也。衆相莊嚴者、喻比丘萬行功德威儀也。

聖客前左右阿難迦葉者、喻二種智。左爲識解脫智、右爲了生死智也。

剃髮披三衣者、剃髮喻煩惱結縛、三衣喻戒定惠。方裙是戒衣、覆膊是定衣、袈裟是惠衣。如是戒定惠、能降貪嗔癡。是故比丘常須剃除煩惱之結、常披戒定惠衣。是名比丘剃髮披三衣。

佛前左右菩薩、赤體不串三眼、唯佩瓔珞者、喻持戒比丘具持如來清淨戒行。及萬行威儀能降身中三毒六賊、及諸境界不亂其心。故喻諸善莊嚴以爲瓔珞。不着衣者、喻殺煩惱一切境。悉能降伏故、菩薩不着煩惱之衣也。

佛前左右力士者、喻比丘勇猛精進。能摧身中三毒煩惱也。

又左右神王、喻比丘內心湛然、不起亂想、心王能調伏諸

根也。

像前燃燈常令不絕者、喻比丘身中覺性。暗喻一切煩惱、明喻智惠法。持戒比丘常持如來智惠之法、於念念中無有異相境界。故喻智惠破愚癡。故喻燈明滅除暗障。

寺中高廣樓閣者、亦喻比丘一報善業成就。積在冥中捨報之時、衆善迎接安居寂滅、常樂涅槃永絕沈淪。言稱彼岸莊嚴衆相寶殿寶樓。由是一生在肉身時、能持忍辱四苦八難、圓滿具足獲涅槃果。是故比丘得如是福報。故喻行人造諸高廣樓閣。

浮圖者、喻比丘自身也。

七竅不級者、喻比丘七竅也。遶塔浮圖行道者、喻持戒比丘常以定心降伏三毒六賊。當令七竅不納五欲、以智惠心遶七竅降諸境界。故名繞塔行道。

十二級者、亦喻持戒僧。常殺六賊六根無染、以禁六賊六識清淨。六種是善、六種是惡。行人常向身中耕使此十二種事。是名遶十二級浮圖道也。道是道德之道、不是世間脚行之道。今時比丘、以脚遶於磚石泥土周、而復始不知休歇繞塔。行於道路之道、此爲迷見也。

四十九尺五色幡者、亦喻比丘身。何以故、一切衆生、無始已來隨諸色境、順於三毒具造惡業。六趣四生無形不受、無苦不經遍受苦畢。今得人身遇佛法。以信受故、能持如來出世間法。戒行具足得解脫果。從是能離一切宿障業故、是名爲幡。變惡爲善、是爲幡義。卅九尺喻比丘七竅之中有其七識。一識

之中具有於七。是故七竅身之爲首、卅九分識性皆變爲善。懸於長竿供養者、行人思惟出世之路、不離心肝無有一時。刹那境界而有散亂。常壞決定繫在心腑。故喻懸竿。亦非質礙竹木之竿。五色者、眼耳鼻舌心是也。此爲五根。常受世間五慾之境。如此之境各爲一色。色爲無量境、聲爲無量境、香爲無量境、味爲無量境、觸爲無量境。

寺中施浴者、亦喻比丘身。是比丘身中、三毒六賊及八萬四千諸境煩惱、觸動淨性。是故比丘、於其身中降伏如此境界。以持智惠法故、不令放逸。若有如此智惠、是名洗浴。衆僧喻身中佛性、水喻智惠法。但能降伏身中一切諸魔境、不亂心王。是名衆僧常得清淨。

俗人供養病僧者、復是何義。並是比丘諸威儀義也。行人截手腕供養、喻持戒比丘斷觸財利之境界也。行人鍊指供養、喻比丘息異念。諸緣不住境、心不觸境。內心異念、是也。行人下劍供養者、喻比丘殺六賊三毒境。行人鈎身供養者、喻比丘淨念超五欲境。行人斷五辛者、喻比丘斷五毒心境。

病比丘者、是名聾盲瘡癩、攣跛癱、坑中餓猶貧窮下賤也。並是持戒比丘具持法故、制稍身心義也。病比丘者、常持禁戒。不觀邪色如盲、不聽邪聲如聾、鼻舌不染味香、是名瘡癩。手不殺生命、脚不行非法之道。是名攣跛。身中佛性未遇法食。坑中餓稱五蔭肉身。故喻爲坑未遇如來法財。是貧窮未持如來禁戒。被染之性、是名下賤。

如來當勸檀越供養。此等之者並是具持萬行威儀比丘身是也。如此比丘、爲持戒故和合之身。其時不得七事、供養法事有關。七供養者、第一床坐、第二中食、第三衣服、第四侍人、第五醫藥、第六迎送、第七歡喜。持戒比丘所至之處、悉皆須得如上七種供養。業行始圓備。

右如前所列種種行門、種々形相、種々事譬喻、悉在比丘身上。行諸方便、以成解脫之果。比丘具持如上諸方便門、皆令備足無有闕失。是故名爲惣持法門。是故名爲入一乘法。是卽名爲入不二法門。若智惠門開、卽得解脫。若未遇大善知識、無解脫期。是故行人要須得善知識。引導開示從彼說中、妙詮其理一一分別。因分別故、始得覺悟。故卽能決斷生死、卽能決解脫之因。如上一一並令了達、一一無有闕失、始名入道也。俗人作福者、以何因緣而得成解脫。因緣十方檀越、當造何福與持戒比丘。相因而得解脫。因其七種供養與持戒比丘、作解脫因。第一施床、第二施中食、第三施衣服、第四施侍人、第五施醫藥、第六施迎送、第七施歡喜。

持戒比丘乃是證羅漢人。所生之處皆悉須得如前七種供養。若不得者道業有闕。闕有何義。第一闕床座、有廢禮拜讚嘆。第二闕齋食、廢讚誦思維。<sup>惟</sup>第三闕衣、有廢講說。第四闕侍人、有廢教示。第五闕醫治、有廢歌頌。第六闕迎送、有廢書寫。第七闕歡喜承受、有廢善解脫想念。

其此七種之中闕一不可。猶如有人一身之中、唯藉七竅萬事

成辦。由此七竅、若無兩目、都視無功。若無兩耳、聽響無功。若無兩鼻、舒吸無功。若無其口、言說無功。是故七竅身之頭首。比丘具持如來法教、亦藉七事供養爲首。其此七事供養、能資比丘道業。亦如身之七竅有殊異。十方檀越爲發善心、所營善業修功德。云何造作而合佛意。唯於持戒羅漢比丘、而行前件七事供養、日夜修營七種功德、報施主恩。

七功德者、第一禮拜讚嘆。第二講說尊經。第三接化初學。第四梵音頌響。第五書持注律。第六讀誦清齋。第七三禪法足。如此七功德、能救身中七識、清淨解脫、以能成就七功德。故皆由檀越七種供養、然捨檀越俗中七種殃罪。

其七罪者、一爲家口田宅駈迫。二爲內外親養及六畜惱亂。三爲種々莊嚴衣服。四爲被差軍陣征討。五爲未拾浴染。六爲病死煩惱。七爲門戶差枿點役。但是俗人無間入道者、皆悉有此七種纏縛。所以於俗務中、抽減七事供養比丘。比丘善業成就、於冥道中相救。教此卽名爲相因解脫。但是俗人爲此七罪、纏縛身心。一切罪業、悉皆因此七種之事。是故比丘爲無如上七種纏縛。所以名爲道中清淨善人。一切俗人、爲有如此七種纏縛、故名爲被禁縛者。一依如前所營卽契佛意、莫獨遍執着於邪路。其遍執者、皆是三人修行之者。何。

第一禪師、執於山藪空居寐處、獨執一門。九部尊經未曾尋討。空思一理善惡不分。魔佛渾齊邪正無二。文不入眼、法不入心、唯言自悟爲功、不假執文有相。言此見者、便是大迷。

何以故、佛說、山者喻於貪心、々々處身甚爲險峻。聚林喻於五蔭、五蔭喻於五毒。卽是眼毒、耳毒、鼻毒、口毒、心毒。如此五林毒心處、中險於山川。比丘若於身中降此貪魔、不令興起、名心定。是名禪師。

第二法師者、作比丘、口常智惠演暢正法、及讀誦歌頌。正念能降口中嗔饒毒魔。是名法師。故如來方便之行、講堂喻比丘身、高座喻比丘覺心、法師喻智。此是法師之義。今時比丘、偏執一理空尋章疏、不契眞如。嗔囂覆心實無智惠。身披質尋衣服而坐、質尋法床又居凡木。講堂口說偏居一法。戒定元無習處、眞惠不了其源。何有滅罪之功。呪更引他凡庶。

第三律師者、行律行、執事爲功。唯律其身、不律其性。何以故者、能正三毒及以六賊、諸境界故、令其心王、不染三毒及以六賊。是名爲律。諸細觸境悉能除。剪喻諸細行。今時比丘、眞示於身行其文字之律、不行如來無相眞律。空執一法、禪惠悉無功跪。是偏執破戒律師者也。是名禪法律等三種法門。於比丘身上、心口身中各行一法、始名三禪之法。是名三寶之義也。智人思之、幸細觀察矣。此文意、呪爲是邪、如有不是、請細詳究。此之所見、具有宗承。不是家生詐傳之理。夫之文義、理有淺深。聲聞所解理、卽繫於聲聞。緣覺所解理、卽執於緣覺。菩薩所解理、卽通於菩薩。譬如江淮與海器量不同。大海納於百川、々灌亦無盈縮。菩薩之見義、通於玄妙之門。緣覺聲聞、若江淮之受納小川、二水及盈縮之期。緣覺聲

聞、未出生死之厄。菩薩見性了々無疑。履解脫門無有障導。聲聞緣覺小道之人。於像中普用如是持戒、不了是非。地獄涅槃未能分別。空執無形之相、空中不了眞形。邪正莫分、魔佛同生。共滅子細尋究空有、並道不知。唯信愚心、扇他邪意者矣。